

【笹川平和財団第 93 回理事会特別講演】

米保守主義の原風景 ーブッシュ政権後の保守主義運動の行方ー

津田塾大学准教授・日本国際問題研究所客員研究員
中山 俊宏

2007 年 12 月 11 日
於：日本財団ビル 8 階会議室



中山 俊宏（なかやま・としひろ）

学歴

- 1990年 青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科卒業
- 1993年 青山学院大学国際政治経済学研究科国際政治学修士取得
- 2001年 青山学院大学大学院

国際政治経済学研究科国際政治学博士取得

職歴

- 1993～1994 ワシントンポスト極東総局記者
- 1996～1998 日本政府国連代表部専門調査員
(政務及び安保理班所属)
- 1998～2004 日本国際問題研究所 アメリカ研究センター研究員
- 2004～2006 日本国際問題研究所主任研究員
- 2005～2006 ブルッキングス研究所客員研究員
- 2006～ 日本国際問題研究所客員研究員
- 2006～ 津田塾大学国際関係学科助教授

(2007年より准教授)

【講演】

○ただいまご紹介にあずかりました、中山俊宏と申します。

私はここ数年間、アメリカにおける保守主義運動を追ってきました。ブッシュ政権誕生以降だけでなく、1950年代からアメリカの保守主義がどのようにして一歩一歩運動の基盤を整えてきたのかということを見てきて、過去数年にいくつかの論文を書いています。添付資料（巻末14ページ）に参考文献として挙げさせていただきました。

今日は2008年の大統領選挙に向けた動き、それから、8年続いたブッシュ政権のもとで保守主義運動がどういう状況になっているのかも念頭に置きながら現状を見ていきたいと思えます。

米保守主義運動が直面する問題の深さ

アメリカの保守主義運動が直面している問題の深さは、単にブッシュ政権が始めたイラク戦争が想定どおりにっていないというような短期的な原因だけによるものなのか。あるいはもう少し構造的な観点から、保守主義運動が直面する壁を考える必要があるのではないかと、というのが1つ目の問題設定です。

次に、2001年にブッシュ政権が誕生したとき、多くのアメリカ人、とりわけ保守主義運動に長くかかわってきた人は、ついに本物の保守主義政権が誕生したと考えました。しかし過去7年間を振り返ってみたとき、果たして本当にそれを保守主義政権と言えるのだろうか、というのが2つ目の問題設定です。

今回の大統領選挙、とりわけ共和党予備選挙を見てみると、数カ月前には泡沫候補と言われていたマイク・ハッカビー前アーカンソー州知事とロン・ポール下院議員が非常に大きな支持を集めている。アイオワ州の予備選挙が1月3日に行われますが、マイク・ハッカビーはここでの支持率がトップです。ロン・ポール下院議員は、支持率は決して高くはないですが、選挙資金の集金額は2007年度第四半期ではトップです。なぜ主要候補を差し置いてこういう泡沫候補が支持を集めているのか。実はこの2人は、アメリカの保守主義の潮流を象徴しているのです。この2人が最後まで残ることはないと思えます。しかし、主要候補の動向をたどっていくよりも、本来泡沫候補であった2人がここまで頑張ってい

ることを通じて、アメリカの保守主義の状況が何らかの形で明らかにできるのではないかということが3つ目の問題設定です。

これらを総合すると、おそらくブッシュ政権下における7年間——もしくは保守主義がクリントン政権下で影響力を発揮し始めた90年代半ばまで遡ることができるかもしれませんが——に絶頂を極めていたかのように思われた保守主義運動が、本来の保守主義から大きく逸脱していく中で、多くの草の根の保守派が、いわば原風景をもう一度自分たちのほうにたぐり寄せようとしたことが、この2人の泡沫候補に対する支持につながっているのではないかというのが今日のお話の大きな問題意識です。

アメリカにおける保守主義運動

保守主義というのは、その国固有の展開の仕方をします。したがって、日本における保守主義とアメリカにおける保守主義というのは、もちろん共通要素もありますが、まったく別個のものであると考えたほうがいいと思います。

アメリカにおける保守主義運動は、1950年代半ばに産声をあげたといわれています。それ以来、大雑把に分けて、常に3つの柱がありました。

1つは「伝統主義」という柱です。50年代は伝統主義的色彩がきわめて強く、ヨーロッパ的な古典教養に回帰するという傾向が強かった。それが60～70年代になって宗教的な保守主義を取り込んでいくとともに、ポピュリスト的な伝統主義という形に変わっていきます。伝統や宗教的な生活を重視するという伝統主義がまず1つの柱としてある。

2番目の柱は「リバタリアニズム」です。フリードリヒ・A・ハイエクの思想に連なる考え方ですが、連邦政府の役割を極小化するというものです。連邦政府に関与してもらいたくない、放っておいてくれという感情は、アメリカの保守主義の中に非常に強く残っています。

3つ目は「殉教的反共主義」です。なぜ「殉教的」という言葉をつけるかということ、50年代に保守主義運動が始まったころ、「反共主義」というのはアメリカにおいて1つのコンセンサスを形成していたといっても言い過ぎではありません。60年の大統領選挙のケネディとニクソンの対決を見ても、どちらが反共かということ、もちろん国内の赤狩りをやっていたニクソンのほうが反共主義者というイメージが強い。しかし外交

政策については、ケネディのほうが反共的な場合もあったと思います。保守派の反共主義は何が違うかという、保守派はそこに殉教的な、使命的な意味合いを見出し、善と悪の戦いと捉えて国際共産主義運動と対決していった。これがいまでも強いアメリカを指向する、国防を重視するという形で続いていると思います。このように、3つの潮流が存在し、必ずしもその3つが常に同じ方向を向いているとは限らなかった。

そういう意味で、アメリカにおける保守主義運動は、一度たりとも内的整合性のあるイデオロギー運動であったことはないと言えます。しかし、大きな意味で目的を共有する。それぞれの違いを脇に置いて、融合して1つの運動として展開していく。こういうことを自覚して、保守主義運動は60年代前半から後半にかけて盛り上がっていきます。これは「融合主義（フュージョニズム）」と呼ばれています。いわば、アメリカにおけるリベラリズムを敵と設定して政治運動を展開していく。当然のことながら、リベラリズムは伝統主義者にとっては価値相対主義の元凶です。リバタリアニズムにとってリベラリズムは「大きな政府」の元凶である。またリベラリズムは、殉教的反共主義者にとっては容共主義、敗北主義の元凶である。そこでリベラリズムを敵と設定して、保守主義運動内部の差異はとりあえず置いておいて1つの運動として展開していくことが運動のエンジンになったということが言えると思います。

その過程で、当然政治運動ですから、いろいろなものが入ってくる。「新保守主義」はもともと左翼運動の中から出てきた保守主義運動ですから、本来の保守主義運動の中では異端です。しかし、大きくリベラリズムを敵として共有するということで展開してきた。

保守主義運動を語るときに、しばしば左翼運動とのアナロジーで、たとえば共産主義と社会主義と社会民主主義はお互い融合できないということを引き合いに、保守主義運動内部の亀裂ばかりを強調する癖が観察者の側についていたわけです。しかし、1964年の創設以来保守主義運動のプラットフォームとなっているアメリカ保守同盟（American Conservative Union）の会長であるデヴィッド・キーンは、「保守主義はそれぞれの主義がはっきり分かれているわけではない。左翼のアナロジーで保守主義運動を捉えるのではなく、1つの連続体として捉えるべきである。保守主義運動は左翼以上に融合することが可能である」と述べています。

迷走するアメリカの保守主義運動

アメリカの保守主義運動はいまどうなっているのか。ジョージ・ナッシュという、保守主義運動の公式の歴史を書いた——公式というのも変ですが、そのように多くの活動家からみなされている——歴史家がいまいます。彼が最近発表した論文で、「保守主義運動は mid-age crisis に陥っている」と述べています。どういうことかという、保守主義運動を支えてきたシンクタンクや政治団体などが大体設立から 40～50 年たっている。人間と同じで、組織も制度疲労し、かつてのエネルギーを失っている。そもそも保守主義運動がアメリカに登場したときは、共和党の中でも異端だった。当時はロックフェラー・リパブリカンズといわれる、東部ビジネス・エスタブリッシュメントと近い党員が共和党の指導的な地位を占めていた。そういう中で、イデオロギー色の強い保守派というのはマージナルな存在だったのです。保守派が影響力を伸ばしていくにあたっては、言葉は悪いですが、共和党をハイジャックする必要があった。

当時、共和党と保守主義運動というのはイコールではなかったわけです。そういう意味では、あくまで共和党の中の反乱分子に過ぎなかった。その反乱分子がシンクタンクや政治団体を使って共和党そのものを変えていく、このプロセスが 70 年代に進んでいくわけです。

先ほど申し上げたように、90 年代以降、保守派が党内で指導的地位についたことによって共和党の舵を握り、エスタブリッシュメント化していく。そういう中で、自分たちの支えてきた組織が設立 40 年、50 年を迎えて、設立当初のエネルギーを失っていく。そういう状況の下でブッシュ政権が誕生したと考えていただいたらいいいと思います。かつて反乱分子だった者がエスタブリッシュメント化し、さらにブッシュ政権誕生時に上下両院で共和党が多数派になり、自分たちの圧倒的な地位に安住する形で政権運営を始めたということです。

ブッシュ政権が誕生していろいろなことがありました。言うまでもなく、いちばん大きな事件は 9.11 です。その対応をめぐるのは保守主義の活動家、保守派の重鎮の知識人の中からは相当早い段階で批判が出ている。共和党の議員がブッシュ政権を批判することは稀でしたが、運動にアイデアを供給してきた知識人や、運動のインフラを整えてきた活動家は「ブッシュ政権は実は保守的な政権ではない」と強く批判しています。いまでは相当広くこの感情が共有されている。ただ、表立って政

権批判を行うことが必ずしも賢いことかどうか判断は分かれるので、それほど大きな声を立ててはいません。しかし、そういう感情は広く共有されているということは間違いありません。

そういう状況の中で2008年の大統領選挙を見てみると、保守派が完全に同意して推せる候補が久しぶりにいない選挙ということが言えると思います。最も典型的な例がジュリアーニ候補です。中絶反対という立場を打ち出していないのに共和党の大統領候補になった最後のケースは76年のフォードです。したがって、もう30年以上、共和党の大統領候補になるためには、中絶反対という立場を打ち出さなければならなかった。しかしご承知のように、ジュリアーニは中絶を容認していますし、同性愛の結婚についても相当寛容な姿勢を示しており、明らかに保守派が支持できる候補ではない。そのほかの候補者についてもそれぞれ問題があります。

ハッカビー／ポール運動の意味

そういう中で、ハッカビーとポールという泡沫候補をめぐる動きが盛り上がってきている。添付資料にあえて「ハッカビー／ポール運動」と強調の点を打ったのは、これが単にトップダウンで形成されている政治運動ではなくて、むしろトップダウンの力学から漏れてしまうような感情が下から組織化され、社会運動的にハッカビーの運動とポールの運動が支持されているということを表しています。これは先ほど申し上げた、本来保守であったものに立ち帰るべきだという強い思い、言い換えれば原風景への回帰衝動とも言えます。

ハッカビーとポールがそれぞれどういう思想を抱いているかを簡単に見ていきたいと思います。

マイク・ハッカビーについては、おそらく「思いやりのある保守主義」という言葉がいちばんぴったりくると思います。これはそもそも、ブッシュ政権が誕生したときに掲げた言葉なのですが、まったく中身が伴わないまま言葉だけが残ってしまって、いまハッカビーが改めて「思いやりのある保守主義」という立場を打ち出そうとしています。ハッカビーはエヴァンジェリカル（福音派）というキリスト教右派の牧師だった人ですから、もちろん中絶、同性婚などについては従来どおり非常に厳しい姿勢を取っています。そういう問題についてはきわめて厳格です。そ

の一方で社会的弱者に関する問題——HIV や貧困問題など——にもキリスト教は取り組んでいけるという、新しい切り口の「思いやりのある保守主義」を提示している。70年代後半以来、労働組合が民主党を支えてきたように、選挙になると宗教右派がずっと共和党を支えてきました。今回はどうか。ハッカビーに対しては、必ずしも宗教右派指導者たちが支持を表明していません。しかし、指導層とは離れる形で宗教右派のグラスルーツの信者たちがハッカビーを支持しているという点が新しい動向です。これはある種、グラスルーツの宗教右派の反乱という解釈もできるのだらうと思います。

ロン・ポールの場合は、「リバタリアニズムの反乱」ということにつきます。ポールは「メッセージ・キャンディデイト」、つまり自分が実際に当選するなどとは決して思っていない。リバタリアン原理主義的な立場から、ひたすら自分の主張を保守派への批判として展開している。彼は徹底した不介入主義者です。日米同盟にも批判的ですし、日韓同盟にも大西洋同盟にも批判的です。アメリカは帝國的に外に出ていくのではなくて、自分たちの領分を守って国内にとどまっているべきであるというのが彼の主張です。イラク戦争も徹底的に批判しています。彼は保守派の孤立主義的衝動を刺激しています。

世界を社会工学的に変革していこうとしたブッシュ政権の外交政策、「小さな政府」という標語は掲げながらも実質的にはどんどん大きくなっていく政府、また選挙のときは調子良く宗教右派的なメッセージを前面に出すが、実質的には価値相対主義がどんどん進展していくことに対する違和感が、2人の泡沫候補に集まり、ある種の社会運動的なエネルギーになっているのだらうと思います。

アメリカの保守主義運動の行方

最後に、今後の動向を簡単にお話しします。

保守主義運動は、20世紀後半のアメリカにおいて最も成功した思想・政治運動であったことは間違いのないと思います。それを否定するのはなかなか難しい。しかし、本来保守思想は、何が不可能かを確認する、政府は何ができないかを確認する思想運動であったと思うのですが、それがあるときミッションを持った「使命的保守主義 (Missionary Conservatism)」に変化して行ってしまった。これにはいろいろなプロ

セスがあると思います。レーガンもその変化に一役買ったと思います。ブッシュ政権、9.11もそういう流れを後押ししたかと思います。もっとたぐり寄せていくと、おそらくアメリカという国の国民性というか、政治文化に由来するものだと思うのです。レーガン保守主義を「Sunshine Conservatism」、つまり太陽の光が射すような保守主義と言います。本来、保守主義というのは人間の限界をわきまえて、陰うつで、思慮深く、まさに「sunshine」とはまったく反対のベクトルを持った思想なのです。保守主義がアメリカに移植される過程において非常に楽観的なものになっていき、自らの正しさを信じる保守主義になった。ということから、いまのブッシュ政権の「使命的な保守主義」が誕生してきたのではないかと考えられると思います。

そのような中で、「(原風景的な) アメリカへ帰ってこい」——これはイラクに駐留する兵士に対する呼びかけでもあります、それを超えるものでもあります——という衝動がポールとハッカビーの台頭を促した。さらには、50年代に保守主義運動が政治運動として台頭してきたときに非常に大きな機能を果たした融合主義によってこれまで封じ込めてきた差異が、再び現れつつある。たとえば、伝統主義者と、リバタリアン的な徹底的に自由を重視するような立場の間の矛盾が出てきている。実は、このハッカビーとポールはそれを象徴していて、2人とも保守派ではあるのですが、この2つのグループはまったく相容れないものと考えていいと思います。

保守主義というものを再定義すべく、いくつかの動きがあります。その中でも、ブッシュ大統領のスピーチライターだったマイケル・ガーソンが最近『Heroic Conservatism (勇敢な保守主義)』という著書の中で、強いアメリカと思いやりのある保守主義を組み合わせ、保守的なビジョンをつくれないうか、と述べています。新しいビジョンをつくるためのいろいろな試みはありますが、まだ明確な方向性は見えていない。おそらく保守主義運動が今後また大きな影響力を発揮して、共和党を引っ張っていくような政治イデオロギー、もしくは政治運動になっていくためには、新しい形での融合を模索していかない限り、非常に難しいのではないかと。

保守派の現状、保守派に支えられた共和党の状況というのは、単にイラク情勢、政治的なスキャンダルなどをめぐって向かい風が吹いているということではなくて、もうちょっと構造的な要因があるのではないかと

というお話をさせていただきました。

【質疑応答】

○**秋山昌廣評議員** 私はアメリカは覇権国だと思いますが、覇権主義なのかどうか。つまり、アメリカの国益を中心とするのか、もう少し国際的な利益を目標としているのかはわかりませんが、アメリカが覇権国家である、もしかしたら国益中心の覇権主義国家であるということと、保守主義の関係というのはどのように理解したらいいのでしょうか。

○**中山** 核心を衝いたご質問で、お答えするのが大変難しいのですが、冒頭でも申し上げたとおり、保守主義の中にもいくつかの潮流があります。アメリカの覇権国的な地位が非常に快適なグループ、逆にロン・ポール支持者に代表される、それをきわめて不快に感じ、アメリカの帝国化に対して大きな違和感を抱くグループなど、いろいろあると思います。アメリカの置かれている状況の中で、どの勢力が有効な回答なり議論を提供できるか。9.11直後、アフガニスタン、イラク戦争となだれ込んでいく中では、アメリカの覇権国的な地位を積極的に是認する新保守主義勢力が影響力を持った。

しかし、彼らが描いた設計図のとおりに行動していった結果、いまはむしろアメリカの国益を害するような状況が発生している。その中で、保守派の別の潮流が声をあげているという構図があります。保守主義として覇権国についてどのように考えるかという共通基盤はないのだろうと思います。

○**水口弘一理事** 融合に関して、先生の資料には「ふたたび融合するのか？」とクエスチョンマークがついていますが、学者の視点というより、現実的な国際政治という観点で、先生の見解を是非お聞かせください。

○**中山** これは少々短期的な話になってしまうかもしれませんが、90年代冒頭、保守派は国際共産主義運動という大きな敵を失って、ある種の迷走状態に陥ってしまいました。一部の保守派は、左傾化する大学のカリキュラム改革に対する攻撃をして、どうにか運動を1つに保とうとしていたわけです。

そういう中で最大の贈り物は、おそらくクリントン政権だった。1960年代的な「リベラリズム」、「何でも心地よかったらやっつけてしまえ！」的

な文化を象徴するようなクリントン大統領がホワイトハウスに入ったことによって、文化的な保守主義運動が1つに結束して敵を見つけた。

これはちょっとジャーナリスティックな分析ではありますがけれども、2008年の大統領選挙でヒラリー・クリントンが民主党の大統領候補になった場合には、1990年代初頭のときと同じように保守主義運動にとって大きな贈り物になるかもしれません。保守派のヒラリー・クリントンに対する不信感は、ビル・クリントンに対する不信感よりも強い。反ヒラリー・クリントン運動が盛り上がりを見せる可能性はあります。

ただ、保守主義運動はこれまでずっと何かに対抗する運動であると同時に、いくつかのビジョンも打ち出してきました。それが「小さな政府」であったり伝統的な価値であったりするわけです。そのような新しい形で再定義することなしに、反ヒラリーということだけで盛り上がるとすると、運動としての持続性はありません。外交・安全保障問題に関しては、ずっと共和党もしくは保守派が1970年代初頭以来——おそらくマクガバンが民主党候補だった72年の大統領選挙以来だと思えますが——優位を保ち、民主党は信頼できないというイメージが定着してきたと思います。2008年の大統領選挙のいちばん大きな変化は、まさにいままで共和党が強みを発揮してきた安全保障問題に関して、どうも共和党は駄目なのではないかという不信感があるということです。そういう意味で、反ヒラリー以外の新しいメッセージを構築していかないと、新しい形で融合して、それを軸にアメリカ国民の支持を取りつけていくことは相当難しいと私は思います。

○**若月三喜雄評議員** 保守主義が20世紀後半のアメリカで最も成功した思想運動ということですが、それにもかかわらず、クリントン政権が誕生しました。今回の中間選挙でも共和党に対する幻滅というのが出てくるでしょう。民主党は中道的政策で、アメリカの保守的な要素をうまく取り入れて成功してくる。そうすると、保守主義は確かに成功しているのかもしれませんが、反対にリベラリズムも大きな成功を収めているのではないかという気がするのですが、いかがでしょうか。

○**中山** まったくそのとおりです。資料の「米保守主義運動の行方」の中に保守主義運動を「20世紀後半の米国で最も成功した思想運動」と記しましたが、20世紀前半は間違いなく「ニューディール・リベラリ

ズム」が最も影響力がありました。これは政治思想というよりも政策の束で、これが1950～60年代後半まで続きました。それ以降、権力奪取をひとつの成功の基準だとすると、保守主義運動は最も成功した政治運動だという評価が可能です。

ただ、いまご指摘があったように、その基盤が瓦解し始めていることが明らかになっている。瓦解の元凶はどの辺にあるのか、というのが今日のお話の中心でした。

他方、民主党も、いままで保守的なイデオロギーが埋めていた部分がなくなり、その真空を埋めるような新しいアイディアを持っているかという、必ずしもそうではない。いままで民主党左派は危険な存在とみなされていたため、あまり大きな声をあげなかった。ここ数年ようやく民主党内の左派が声をあげるようになりましたが、彼らは決して新しいビジョンを持っているわけではなく、あくまで民主党内の力学に対して不満を持っている勢力です。そういう意味で言うと、民主党も、60年代に挫折したニューディール・リベラリズム、あるいはクリントンの、アメリカにおける保守化と同調するリベラリズムに代わるような新しいビジョンを、必ずしも提示し切れていないような気がするのです。

2006年の中間選挙は民主党が勝ち、今回の大統領選も民主党優位で進んでいますが、構造的に見ると、イデオロギーの空洞化のような状況下で行われている選挙なのではないか。民主党が確固たるアイディアを持っているという印象はあまりいまのところ受けない。たとえば中間選挙のときには、現下院議長のナンシー・ペロシなどを中心に、「New Direction for America Six for 06」、06年の選挙のための6つのポイントという政策綱領を掲げて戦いましたが、いまではその6つが何だったか覚えている人はほとんどいないと思います。

そういう意味で、民主党は政策、あるいは新しいビジョンで勝ったというより、共和党側の失策をベースに勝っただけであって、新しいものが見えてきているという印象をまだ持っていません。どのような思想的潮流がこのイデオロギーの空洞状態を埋めるのか、これからそれに注目していかなければいけないと思っています。

【巻末資料】

米保守主義の原風景

ブッシュ政権後の保守主義運動の行方

- 米保守主義運動が直面している問題の深さ
- 果たしてブッシュ政権は保守政権だったのか？
- なぜ 2008 年大統領選挙共和党予備選挙でマイク・ハッカビー前アーカンソー州知事とロン・ポール下院議員（テキサス 14 区）が善戦しているのか？
- 原風景への憧憬

アメリカにおける保守主義運動

- 三つの柱： 伝統主義（リチャード・ウィーバー）、リバタリアニズム（F・A・ハイエク）、殉教的反共主義（ウィットカー・チェンバース）
- 「融合主義（Fusionism）」（フランク・マイヤー）¹： 内的整合性のあるイデオロギー運動であったことはない
- 異端としての新保守主義： 米左翼運動の鬼子
- 「連続体としての保守主義（Conservative Continuum）」（デヴィッド・キーン ACU 会長）²

迷走する米保守主義運動

- 「ミッドエイジ・クライシス」（ジョージ・ナッシュ）³ とフュージョンの崩壊
- 反乱分子のエスタブリッシュメント化
- ブッシュ政権の「保守革命」に対する疑問： 保守系知識人・活動家の離反（ウィリアム・バックリー、ジョージ・ウィル、リチャード・ヴィゲリー）
- 2008 年大統領選挙： ジュリアーニとその他の主要候補

1 Frank S. Meyer, *The Conservative Mainstream* (New Rochelle: Arlington House, 1969).
2 David Keene, "A Conservative Continuum," *National Interest* (September/October 2007).
3 George H. Nash, "The Uneasy Future of American Conservatism," Charles W. Dunn, ed., *The Future of Conservatism: Conflict and Consensus in the Post-Reagan Era* (Wilmington: ISI Books, 2007).

ハッカビー／ポール運動の意味

- 社会運動のエネルギー
- 原風景への回帰
- ハッカビーの「思いやりのある保守主義 (Compassionate Conservatism)」：指導層を無視する草の根の宗教右派勢力；宗教右派内部の新しい動向
- ポールの「リバタリアニズム」：保守派に対する怒り；ラディカルな不介入主義；保守本来の姿を原理的に追求 (Message Candidate)

米保守主義運動の行方

- 20 世紀後半の米国で最も成功した思想運動
- 本来はなにが不可能かを確認する思想運動であったのが、「使命的保守主義 (Missionary Conservatism)」に転化
- 「レーガン主義 (= Sunshine Conservatism)」に内在する矛盾：「楽観的な保守主義」「自らの正しさを信じる保守主義」
- 「Come home, America」的衝動、「Trads」対「Libs」の構図の再浮上
- 「勇敢な保守主義 (Heroic Conservatism)」(マイケル・ガーソン)
- ふたたび融合 (フュージョン) するのか？

【参考文献】

拙稿「アメリカにおける保守主義台頭の力学—『アイディア』の戦略的動員」久保文明編『G・W・ブッシュ政権とアメリカの保守勢力—共和党の分析』(日本国際問題研究所、2003年)。

拙稿「アメリカにおける保守主義運動の持久力とその限界」山本吉宣・武田興欣編『アメリカ政治外交のアナトミー』(国際書院、2006年)。

拙稿「民主党多数派議会と党派政治の行方—中間選挙後の米国政治におけるイデオロギー状況の考察」『海外事情』第54巻12号(2006年12月)。

拙稿「米国保守派、苦悩の時代へ—レーガンの不在と思想的基盤の揺らぎ」『中央公論』(2007年7月号)。

拙稿「2008年アメリカ大統領選挙とイデオロギー状況の流動化」『国際問題』第568号(2008年1・2月)[近刊]。